

枯草

野口雨情

青空文庫

花も実もなき枯草の一篇わが親愛なる諸兄に捧ぐ

毒も罪も

草に咲くさへ

毒の花

罪の花みな

紅からむ

羽うるはしき

例の童こが

罪の矢ならば

美^{よろ}し^かろ

唇^{くち}にふれなば

倒るべき

毒の花なら

甘からむ

村の平和

雲の香^か沈む有明の

月の森よりそと出でて

麦の緑の岡に立ち

見るよ平和の村の朝

霞の中に黄金色かねいろの

菜種の花は咲きにしが

葦の芽に降る春雨の

そそぐ韻ひびきも聞きにしが

麦の葉に吹く曙の

風は東にそよそよと

朝の香深き岡なれば

夢美しく眠るらむ

平和の村は有明の

み空に懸る雲の幕

雲の幕よりほころびて

草に甘露の霧が降る

佐渡が島

瞳を上げよ寂しくも

雲にまぎるる島山の

森にぞ秋は浮びたる

入江に満つる海の香かも

思ひか迷ふ金こんじき色の

夕日ただよふ波の上

さても静けき潮さるに

海の日暮れて紫の

雲が流るる佐渡が島

舟ぢや女ぢや腕うでほそ細ぢや

それでは波が関の戸の

佐渡は四十九里沖の島

籠に飼はれし鶯に

桃の花咲く山寺の

籠に飼れし鶯に

仔細きかと申し聞すべく

したり貌かほなる猫の子よ

それは去年の春の事

花は霞にこめられて

桜が匂ふ曙の

帳とぼり薫ずる花の山

うれしき春の終ひねもす 日を

歡び叫ぶ百鳥ももどりの

真珠まだまころがす汝なが声に

ききまどふこそ樂けれ

その日ゆ永き日月を
じつげつ

花の冠かむりの鳥の子と

流転の玉のなが声は

永久とこよの春に響くめり

己おのがのぞみをみだすべく

したたか者の猫の子は

籠に飼れし鶯に

仔細と申し語るらく

鬼のお主

さつさ行きませう

あの山越えりや

淀ながれの流が

花ぎかり

桜は咲けど故郷ふるさとの

月おぼろは朧おぼろに川しぶき

花は咲けどもちりちりに

淀の川瀬の水車みづぐるま

姉はよけれど妹に

鬼のお主しゆうもくべの奎兵衛さん

とても暇いとまはくださらず

それでお主と申すより

さつさ行きませう

あの山越えて

淀は故郷

花の里

百舌子

手をこまぬきて逍遙さまよひの

牛の牧場まきばに日は暮れぬ

夕ゆふべの声の譜に合はず

林の中にひびきあり

松の林のあちこちに

耳傾たたずけて佇めば

そは鴟もづの子のたはぶれて
小鳥とりの音を鳴く狡猾わるもの者よ

汝なれは野の鳥山の鳥

野の朝山の夕間暮ゆふまぐれ

小鳥を覗ねらふ蛇の子の

げに横着しれもの者よ鴟の子よ

花壇の春

土やはらかに耕して

千草の種を培つちかへば

春風いまだ吹かぬ間に

芽こそ細くも萌えにたれ

やがて春風そよそよと

吹けば真昼の日もゆるく

ゆふべ
夕となれば白露の

清き匂も満ち渡る

月を重ねるはや三月

日に日に草ははぐまれて
葉ゆらぐ陰かげにさまざまの
小ちひき蕾も見ゆるかな

ある夜春雨草の葉の

緑いろよくそそぎしが

あくるあしたの夕ゆふべより

つぼみは花と咲きにたり

花壇の土の美しく

今こそ花は開きたれ

春の日燃ゆる炎陽かげらふに

花の露の香かゆふべも消えじ

恋の娘は何誰でござる

お竹お十七

暮の春

泣いて別れた

事もある

三十九でさへ花ぢやもの

お十七ではまだ蕾

花の蕾の身であるに

なんで浮世が嫌ぢややら

ほんに去年のわづらひは

町のお医者を頼まれ申し

お医者よけれど嫁さに行かば

恋の娘と名に立てられむ

恋の娘は何誰どなたでござる

お釈迦さまではあるまいし

甘茶にするのは

罪ぢやもの

お竹お十七

暮の春

泣いて別れた

事もある

踏青

霞の幕はたなびきて

春は土佐絵の山桜

君よ青きを踏み玉へ

いざ野に出でて踏み玉へ

春のよき日は麗うららかにに

こがねの雲の日は燃えて

野にも山にも流ながれにも

百千ももちの鳥はさけぶめり

君よ青きを踏み玉へ

いざ野に出いでて踏み玉へ

踏めば緑の若草に

ああ春の香は深からむ

悲劇

安鎮清姫日高川の絵を見てそぞろに恋の悲劇を思ふ

夕ゆふべは萌ゆる恋草の

あしたは消ゆる花の露

夜よは美しき墨染の

絹紅もみの裳裾もすその身ぞつらき

君よゆかしき紫の

ゆかりに結べ袖と袖

蝶ちちははよ花よと父ちちはは母の

膝にすがるは恥かしき

恋の悲劇は玉の緒の

総ての罪の終りなり

罪の終りはうたかたの

日高の川の涙なり

逢^{あい}はせぬかよ

この川すそで

一^{ひと}夜^よどまりは桜の花よ

花のやうなる旅の僧

夜より朝への海

泡立つ海の輝くは

ああ太陽あまつひの照すなり

宝の沈む夜の海は

人おもひに想をいたましむ

ぬぐふが如き白銀しろがねの

月の光は玉を綴り

織ほそくも雲遠くあかねさして

平和に満つる海の朝空

瑠璃なす蜜みつの香かに酔うごと

琥珀はくの盃くちを嘴くちにふくみて

はしらの宮みやのみ使つかひの

鳴は雲にまぎれ飛ぶ

それはお無理と申すもの

閨ねやの襖ふすまに紫むらさきの

ゆかりの幕まくらを垂れこめて

如何にお嘆き遊ばすも

それはお無理と申すもの

夜はまばゆき

金屏きんべいに

姫はよき衣きぬ

かつげども

谷の峽はざまの

うむれ木の

世にふるものよ

いたはしき

眉の薄きは濃くならず
鼻の低きは生れつき

如何にお嘆き遊ばすも
医者に薬はあらざらむ

お色黒くば鴨川の

水にしばらく召し給へ

唇くちには京の下町しもの

臙脂えんじほどよくさし給へ

あはれゆかしきみ住ひの
玉のうてなの閨の戸に
如何にお嘆き遊ばすも
それはお無理と申すもの

あはて告げぬ

雛祭りする九歳ここのつの
お竹は又も思ひけり

桃の花 桃の花

雛さまと何語る

去^こ年^ぞも今年も

一^を昨^と年^{とし}も

物めしまさぬ

優しさよ

日は永くして雛様の

欠^{あく}伸^びに暮るる三ヶ日

夜^よは短くて桃の花

ねむた顔なる春の宵

あるよひなだな
一夜雛壇灯は消えて

幼きものよと子鼠の

幾ともがらは忍び来ぬ

されども家人ひとは知らでありき

ひえ
雛さまの雛さまの

鼻かぢられて哀れなり

緋桃の花は散りけりと

次の朝ひはしため下婢あはて告げぬ

めくら魚

日の暮方に

空見れば

いつも敢^は果^かない

事ばかり

すすき尾花は

穂に咲けど

秋の花ゆゑ

淋しかろ

恋はすれども

恋わすれども

めくら魚で

阿漕あこぎが浦よ

乙女のひとり

朝見れば東の海に

あやなみ 紋波の低きはあれど

浮雲の白きも見えず

海鷗^{どり}は沖に飛べども

わたつみの彼方^{かなた}の岸に

しつち 羊飼ふ童もありや

あかつきの東の浜に

朝空のみ神とばかり

さまよへる乙女のひとり

うら若き身にありながら

黒髪は裳裾もすそにかかれ

徒いたづらに嘆くは止めやよ

今朝けさ見れば東の海の

天地あめつちに雲はなけれど

又しても乙女はひとり

さまよへるかな

十二橋

ほんに潮来へ
いたこ

おじやるなら

佐原来栖に
いけす

お茶屋がござろ

姉さ召しませ

のう姉さ

花の乙女が後朝の
かむろ きぬぎぬ

涙の雨が降るぞえの

いちよ
一夜かりねの

手枕に

かりの妻ぢやと唄はれて

明日は何方いづくの何処ぢややら

さつき
皐月照れ照れ

あやめ
菖蒲も植ゑよ

じよろ
お女郎見やんせ十六島は

雨の降るのに花が咲く

闇の韻

月なき秋の夜なぞ茄子枯れたる畑中に鳴く虫あり世人俗
に蚯蚓の鳴くなりと言ふ

あはれ蚯蚓みみづとあざけれど

背戸に人待つ少女をとめご子が

首うなだれて闇の夜に

聞くよ淋しき汝なれが唄

見よ閨ねやの戸の夕間ぐれ

あふぐになれし星の海

されど心の香かに酔うて

よしなきことを思ふかな

閨うしほの潮うしほに沈みたる

静夜しづよの夢はさまさずも

夜鳴く虫のかなしさに

忘れがたきがあればなり

春の名残の

時の上に

紅き花こそ

惜みたれ

夏の流れの

行く水に

真白き花も

咲きにたり

翼あらむか空ゆくに

瞳あらむか物見むに

いづれ羽根なき翼なき

なれは盲目めしひの土の精

ゆふべ
夕さびしき草の戸の

雲にこぼるる星影を

いち
市に行くべき虫ならば

おもひ
さこそ思も清からじ

ああうぜう
嗚呼有情の萬象の子よ

なくさ
慰藉に唄ふひとふしも

げに東雲しののめの近づけば

塵あくたと埃うまいに甘眠せむ

朝は静けき太陽あまつひの

織ほそくも雲とほく照しつつ

白露しげき草の葉に

あはれなが世さちの幸ありや

なれの姿は醜くも

ものの悲しき音ねにふれて

細く妙なる美よきこゑを

聞けば胸こそすみ渡れ

人の生活いのちたたかひの戦も

あはれ声なき夜の陣

いのりに眠るなが唄の

曲ふしに律ある闇の韻

それは去年の昨日まで

三十七年暮の二十七日、吾不運を嘆きつつ日没の海辺をさまよひて、同じおもひにありと聞く古河の思水子に寄す

風はおろし風で

寒からむ

幾夜の夢や
時しぐ雨るらむ

それは去年の昨日きのふまで

俗に落ちなば死すべしと

鷹やりは鏝さむらひても武士さむらひの
鷹やになるべう志

彼かの青空を眺めては
空かけ渡る羽なくも
必ず鷹たのしになる身ぞと
楽たのしみたりし甲斐なさよ

詩人は銭ぜにを惜むなと
それやこれやに呵しかられぬ
されどなりはひうがらが生活を

思はぬ訳にはなり申さず

お錢あしと申すしれものに

百のしもどを打たたかれて

ああ徒いたづらに手をもがき

足をもがいて詩うたならず

弦つるにはなれし弓の矢の

月日立つのは早けれど

終をはりはすべて

涙なり

青空文庫情報

底本：「定本 野口雨情 第一巻」未来社

1985（昭和60）年11月20日第1版第1刷発行

底本の親本：「枯草」高木知新堂

1905（明治38）年3月14日刊

初出：村の平和「労働世界」

1902（明治35）年7月3日

鬼のお主「常総新聞」

1905（明治38）年1月1日

花壇の春「暗潮」

1903（明治36）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2010年4月19日作成

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.w.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

枯草

野口雨情

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>